日本天台への道

白土わか

本学仏教学科の一員として、長らくその職責をけがしてまいりました私は、本年三月末を以て退任いたすこととなりました。そしてこの度は、仏教学会より、日頃考えていること等を、皆様の前で話しをするようとの意向を受けましたので、つきましては、私のささやかな研究の道筋とでもいうべきことを、お話し申しあげてみたいと存じます。

さて講題は、「日本天台への道」とさせて頂きましたが、私はいつの頃からか、自分の研究の中心を、日本天台の学に定めてまいりました。では何故、私の研究課題がそこに定められていったのか。日本天台と申しますと、とかく鎌倉仏教の陰に隠れて、鎌倉仏教の祖師方は叡山を捨てて来たのであるとか、日本天台にはさほど見るべき教学はなく、鎌倉仏教になって始めて、日本の仏教が確立したのである、等々の声を聞くことがしばしばあります。しかしそれにもかかわらず、私が日本天台を研究の対象としたその理由と成りゆきについて、恐縮ですが、私的な話を交じえながら申しあげていきたいと思います。

私は若い時に東京の学校で、国文学の勉強を始めました。それにしても昔のことですので、女の人にとっては狭い勉強の道しか許されておりませんでした。その中で国文学を選びましたが、若い時でありますし、国文学の他にもいろいろの所に目が行くというさまでした。そうした私が、国文学の中に現われてくる仏教に関することがらに目を引

かれていったのですが、その内容についてはさっぱり理解がゆかない。それで、先生方に質問を致しましても、何故かお答えにならない。私は今にして思うのですが、まだ第二次大戦の始まる前のことであり、あの頃の国文学の老先生方には、徳川時代以来の国学の流れがなお続いていたのではないかと思うのです。そしてその折の国文学の主任教授であり、私が最も多く御指導を受けたのは、国文学者として歌人として令名高い尾上柴舟先生でありました。尾上先生からは、いわゆる文学というものの真中を把握する心も、仏教の書物を読んでその核心に肉薄しようとする心も、通じあうものであろうと、今にして思いますが、若い頃に尾上先生より頂いたものは、本当に大きかったと思うのです。それにしましても尾上先生からが、私の素朴な質問に対して、何故かお笑いになって、「さあ、分からない」といわれる。その分からないということを、若い私は真に受けて、それなら自分でやるしかないと思い定めたわけであります。後で分かったことですが、尾上先生がお書きになったものを拝見いたしますと、日本の古典に仏教の註もつけておられるのでございまして、決してお分かりにならなかったわけではない。ただあの老大家は、若い学生を黙って見ておられたのでありましょう。

国文学の中におびただしく現われている仏教に対する一種の驚きと好奇心と、同時に自分の内面的欲求とから、私は仏教の書物に触れるようになりました。神田の神保町にまいりまして、今思いますと、あの平楽寺書店発行の『法華経』を買い、辞書は浩々洞発行のものを、仏教概論は高木櫪堂という先生のものを、この先生が竜谷大学の先生であったことは後で知ったのですが、こうして独学で集めた書物を読んでゆくうちに、仏教とはこんなに素晴らしいものかと、ただ驚くことのみでありました。それにしても最初は、仏教の言葉が難しくて、まるで英語の単語を引くように辞書にたより、独りよがりに、『般若経』を『華厳経』をと読みすすみ、眼の開かれる思いで仏教に傾斜していったのでございました。

国文学の勉強を決して捨てたわけではありませんけれども、仏教学の勉強を本格的にしてみたい、それには東京よりも京都の方が良いのではないか、京都には仏教の伝統が生きているのではないか、というような素人考えで京都に来たのでございました。たまたま、国文学者の顕原退蔵先生にお会いする機会がございましたが、顕原先生は私に、大谷大学で勉強することをお勧めになりました。先生は大谷大学の仏教学を極めて高く評価されておりまして、「あそこには山口益博士という学者がおられるが、あの方は立派な学者である。山口先生について本格的に仏教学をやってみないか。また大谷大学には秀れた思想家の鈴木大拙・曾我量深といった方々がおられる。その上、図書館には貴重な多くの書物を蔵している。」という事でありました。私はその御言葉のままに大谷大学に参りまして、山口益先生にお会いしたわけであります。

山口先生は、物凄い迫力に満ちた学者でございました。先生がまだ学長になられる以前のことですが、このような学者がおられたのであろうかと、眼の鱗がはがれる思いでございました。先生のもとではとにかく、ただ厳密にインドの仏典を読むことでございまして、私は「行」のつもりで勉強にはげまなければと思っておりました。あの頃は『中論註』の解読の折には、大学の内外から研究者が集まってくるといったさまでした。

しかしながら、山口先生は私に対して、「お前にはお前のやることがあるはずである。それを何時始めるのか」と、督促されたのでございます。それは、若い時に勉強した国文学の中の仏教という問題を早く解決せよ、という御言葉だったのでございます。しかし、山口先生のもとで勉強しているインド仏教は、日本の文学の問題には直結しないのであります。その間には、いくつもの山あり谷ありで、それをまず勉強しなければなりません。とりあえず、最も手近かには、日本仏教の勉強から始めなければなりません。しかし、その頃、大谷大学には日本仏教学の講義はありませんでしたから、私は暗中模索のままに勉強を始めました。

まずそのために、一乗寺の曼殊院御門主山口光円先生のところに、天台学の講義を聞きにまいりました。叡山の天

台学は、日本文学に極めて近い関係にあるであろうと考えたからでございました。叡山に伝わる伝統的な学問を身につけたいとも思ったからでした。曼殊院では『摩訶止観』を恵心流の訓み方に添いつつ読んだのですが、他に一二の方と御一緒の、折々に叡山の昔のお話が出て、少しづつその勉強になれてゆきました。その間には、曼殊院所蔵の古文献を見る機会も出てきました。

山口光円先生からは、「日本天台の中では、口伝法門については誰も研究していないが、それをお前はやらないか。」とのことでございました。何れの日にかはと考えておりましたが、これは日本天台との最初の出会いでありました。

その頃、フランスに勉強にゆく話がもち上がりました。それは京都を訪れた、フランスの日本学者ベルナール・フランク氏が、この方は今はコレジュ・ド・フランスの日本学主任教授ですが、私にフランスに勉強に来ないかと云われます。そうしたなら、お前は勉強になるであろうし、我々も随時にお前から聞くことができるというのであります。フランスはかつて山口益先生が勉強なされた所であります。私は広く世の中を見たいものと思い、喜んでフランスへ参りました。

フランスに参りましてからは、フランスの学者は勿論、その他のヨーロッパの学者にお目にかゝる折を得ました。その中で、最も強い印象を受けたのは、ベルギーの碩学エティエンヌ・ラモート師の謦咳に接することを得たことでした。ラモート先生は山口益先生の友人でありますが、私が日本を出発する前に山口先生から、必ずベルギーに先生をお訪ね申しあげるようにと云われておりましたし、私も稀代の碩学にお目にかかれる期待と緊張とに満ちて、ルーヴァンの先生のもとに参上いたしました。ラモート先生はその頃、『大智度論』フランス語訳註の第三巻の仕事をしておいでした。細かい字で書かれた原稿が、机上にうず高く積まれておりました。ラモート先生はカトリックの司教様でいらっしゃいますが、司教様が仏教研究に生涯を捧げられることについての私の素朴な質問に対して、「私は毎日、美しい花を愛づるが如くに仏教の書をひもといている。」と先生は答えられたことでした。敬虔なカトリック

教徒である先生が、仏教の書物に対して、深い愛情と畏敬の念をもって、あれほどまでの研究業績をあげておられたのでございました。仏教であれ、キリスト教であれ、宗教というものに対するときの、心の要諦ともいうべきものを先生は深く身につけておられ、そのことに対して私は大きな感銘を受けたものです。ヨーロッパ滞在中にヴァチカンの奥に許されて参った折の感慨も、決してそれに優るものではありませんでした。

さて、パリでは何人かの先生方の講筵に列なりましたが、ソルボンヌの中にあったインド研究所における、ルイ・ルヌー先生のサンスクリットの講義は、大家の学殖に触れてまことに充実したものでありましたが、先生は途中で急逝され、本当に残念でございました。ジャン・フィリオザ先生はクメールの仏教遺跡や仏像について話しておられましたが、チベット学のマグドナルド女史やインドのブハッタチャルヤ氏等も同席しておりました。アンドレ・バロー教授は原始経典のほか、ルーマニヤから来た学生の求めに応じて、密教の文献を読んでおられました。ポール・ミュス教授はコレジュ・ド・フランスで、仏塔に対するイコノグラフィー的な研究から、信仰や思想に入ってゆく講義をされておりましたが、これには大勢の研究者がつめかけて話を聞いておりました。

これら諸学者の研究は、いずれも厳密な資料探求を経て、すなわち文献学派といわれるような、その筋道を通って、仏教の信仰なり思想なりの解明に努めてゆくものでありました。それは山口益先生の方法にも通ずるものでございました。

このようにして、フランスの諸学者より教えられるところは大きかったのですが、それにもまして、私がフランスで学んだことは何であったかと申しますと、フランス人の文化というものに対する畏敬の念と、犀利な眼でございました。それは何世代にもわたってあの人達が培ってきた、深く裏打ちされた眼でありました。

それは日本の文化や宗教を見る上にもあらわれておりました。特にベルナール・フランク教授は、日本のそれらに対して深い愛情と理解を持っている学者ですが、このフランク教授は再三、私に向って、「日本の文化や思想を見て

ゆくと、平安時代の仏教というものが、どうも大きな意味を持っているように思われて仕方がない。しかし、日本の学者は鎌倉時代の仏教について我々に教えてくれるけれども、平安仏教については教えてくれない。あなたは勉強して、どうか我々に、その点について教えてほしい。」と云われるのでございます。そして、フランク教授や、また日本歴史の研究家であるフランシン・エラーイ女史から、日本の文化や仏教等に対して、鋭い示唆に満ちた質問を受けるごとに、私は自分が日本をいかに知らなかったかを痛感するのみでした。

日本人だから日本を知っていると思うことの錯覚を、はっきりと自覚した私は、早く日本へ帰って、日本の勉強をしなければならない。奈良であれ、京都であれ、叡山であれ、そこのお寺の蔵の中の書物を見せていただき、自分なりに日本仏教学というものを組み立てなければならない、そんな風に考えたのでございます。

ですから、その頃、病気療養中であったチベット学者マルセル・ラルー女史が、私の為に研究の便宜をはかるから、しばらくパリに残って、日本文学と仏教についての論文を書くようにといわれる。そのお勧めを辞退して帰ってきたのでございました。ラルー女史は山口益先生の友人でございますが、私はパリ滞在中、余り人にお会いにならない、御病身のラルー先生の御厚意を度々受けたのでございました。私が日本文学と仏教という問題に関心を持っていると申しましたところ、先生は、それはフランス人にとって極めて興味ある問題だから、是非ここで論文を作るようにとお勧め下さったのでした。しかし、資料の少ないフランスで仕事をするよりは、日本へ帰ってやらなければならないことがある、そう思ってラルー先生の御言葉を辞退して帰ってきた次第でした。

その頃から私は、日本天台を終生の研究の中心に据えようと思うようになりました。そうして勉強をすすめて参ります間に、往昔の秀れた学僧たちの業績を目のあたりしたのでございます。また真摯に法を求めた人々の姿を知ったのでした。

一方、さきほどから話題にいたしました日本文学との関係という点に致しましても、日本天台の止観ということが、

日本人の文学理念に深い関わりを持っていることが知られるのであります。そのことは平安時代以来、連綿として現代にまで及んでおります。近くに例をとるならば、斎藤茂吉に致しましても、「実相観入の文学」というようなことを申します。古くは藤原俊成や定家の歌論の中には明らかに、天台止観が見ることができますし、芭蕉その他、くわしくこれを論証いたしますならば、天台の止観が日本人の文学理念に深く関わっていることが知られます。そしてこのことはまた、文学の域を越えるものであるように思われます。自己の心を含めて、対象を観ずる日本人の心情に、天台止観が関係するように思われるのでございます。

この問題は、広く深く論証されなければならないことと考えておりますが、本日の私の話題の本筋は、このことを措いて、この頃私が関心を注いでいる日本天台の「論義」に関して、少しく申し上げてみたいと思うのであります。

論義というのは、ただ今では一種の儀礼のようになっているのですが、叡山では四年に一度の広学竪義が今なお行なわれております。また五月の日吉大社社前における法華八講、六月の浄土院における伝教大師御命日の法要等に於て、論義は続けられているようです。そしてそれらの論義には、テキストとして、『台宗二百題』とか、『百題』が用いられているとのことでありますが、これらの書物が、叡山の論義の伝統を受けつぐものであることはいうまでもありません。

この論義は、もともと平安時代の初めから、日本天台に於てその学習・研究の中心に据えられていたことを、改めて考えなおさなければならないと私は思うのであります。

いうまでもなく論義というものは、仏教の中に本来あったものであります。仏教教義の論理的な究明方法として、問答往復を用いて行なわれたものですが、釈尊御自身がこの方法によって法を説かれたと伝えております。すなわち優波提舎 upadeśa でありますが、それは弟子達の間でも行なわれ、また問答体をもって叙述されている論書は、それを継承するものでありましょう。そしてこれらのことは、仏教教理の論理的な性格を示しているとも云えようかと

思います。日本の、叡山の論義もその系譜につながるものでございます。

さてこの論義は中国にも伝えられましたが、そのことは『梁高僧伝』や『唐高僧伝』の記事によって、その実際に行なわれていた様子を知ることができます。またチベットでは、現在もなお僧侶がこれを行なっているとのことです。

日本には早くからこれが入り、七世紀の飛鳥時代に宮廷に於て行なわれたことを『日本書紀』は伝えておりますが、これは濫觴であって、実際の論理究明にはまだ遠いものであったと思われます。以来、奈良時代にも僧侶の身分資格取得上の条件として行なわれていたようですが、これらの点に関しては私は未だこれを明らかにしておりません。

これを叡山に限って申しますならば、平安の初期、最澄の弟子あたりからですが、仏教教理究明の方法として意味を持ってくるようであります。御承知のように日本天台は、四宗融合と申しまして、円密禅戒という多面性を持っておりますが、その中で円教、つまり中国天台の流れを受けた天台学研鑽の場合に、この論義が学習・研究の中心にあったようであります。それは中国天台にあってはどうであったのか、私には未だはっきりしないのでございますが、どうもこれは、日本天台の特色ではなかったかと思われるのであります。

さて、この論義には、論題がそれぞれ設定されております。その論題が、いつの頃どのような経緯を経て設定されていったか、その辺の事情もまだ明らかでありませんが、平安初期に最澄の弟子あたりに始まり、平安中期の良源・千観の頃に至って、基本的な論義の論題はできあがっていたようです。千観には『十六義科』という書もありますし、その頃までは十六乃至二十二の義科、すなわち論義の課題が定着したもののようです。この義科とは、日本天台学研究の為の共通の課題ですが、それに添って実際の論義が行なわれ、また論文も作られてゆきました。良源は、この義科の上に、これを発展させて、更に九十余題を作ったと伝えておりますが、ただ今は、基本的な義科に話をしぼって申し上げたいと思います。

十六義科あるいはそれに六義科を加えての二十二義科とは、どのようなものかと申しますと、「十二因縁義」・「十

如是義」・「二諦義」・「五味義」・「三周義」・「即身成仏義」・「三身義」・「六即義」・「四種三昧義」等々でありますが、天台学の問題を中心にした課題であって、その中には日本天台の問題としての「即身成仏義」があります。また、叡山浄土教の問題としては、「九品往生義」があります。

これらの論題については、学匠の間に「私記」と称する論文に当るものが作られてゆきました。この私記を、目録類でざっと調べてみますと、最澄の弟子円仁には五種類ほどあげられます。ただし円仁の場合、私記と称するものはこの他に、密教関係のものもありますが、それを除いて義科に関するものは以上のようになっています。次に五大院安然には九、良源には十、多武峯に隠栖した増賀にも二種類あります。また一般には浄土教の人として知られる千観には十四ほど数えられます。恵心院源信には十六あります。源信と同時代の檀那院覚運に九、源信の弟子覚超には九、その弟子の寛印にも二種類あります。

以上、ざっと数えあげましたものは、平安中期までのものですが、この最も日本天台の学問が高潮に達したの頃のものは、今あげた学匠以外のものを合わせると、約八十種ほど数えることができます。実際にはこれ以上あったのでしょう。これらの中で現存しているものは、約二十種ほどあります。結局は四分の一ほど残っていることになります。ただし私達は、これらを全部簡単に見ることはできないのであります。というのは、この中で活字になっているのは十種に満たないのであります。あとは寺院の蔵の中に所蔵されているものです。たとえば、坂本西教寺の正教蔵のものなどであります。

これら現在の私記の中で、その二三について申し上げてみたいと思います。まず千観の『十二因縁義私記』ですが、この千観はさきほども申し上げました通り、一般に浄土教の人として知られ、箕面に隠栖した人ですが、この人の『十二因縁義私記』であります。これを見ますと、その冒頭に「法華玄義第二に依って此の問答を作る」と記されてありまして、『法華玄義』巻二に天台大師智顗が述べている内容に添って、それを問答体に編成し直して書いているので

あります。しかしながら、筋道として『法華玄義』に依ってはいるものの、『玄義』をそのままに踏襲しているのではないのであります。そこでは智顗の説明より一歩出て、智顗が問題にした点について、千観が独自に克明に論を展開しているのであります。そしてそれは、まことに精緻な、諄々と進められた所論なのです。

この書物は『十二因縁義私記』ですから、特に無明とか行・識については非常に精密に、問答体を以て論を展開していますが、それは千観の自問自答のように見えていて、他の要素をもあわせ持つもののように思われます。すなわち、その問いの出し方には、千観の考えのみならず、その当時の人々の論争や論説を反映しているのではないかと思うのです。この点は千観のこの私記の場合だけではなく、他の私記についても一般的に云える事であろうと思います。

私記の場合、その所論の設定はまず中国の仏教書に依り、そこから克明に論を展開して、その独自性にまで進んでゆく、千観の『十二因縁義私記』も、その無明・行・識についての論はそれをよく示していると思いますが、こういう点を見ますと、日本人の仏教の受けとめ方の特徴がうかがわれるようであります。日本人の受けとめ方は受け身です。それは、日本仏教というものに通ずるひとつの特色のように思われます。

このような事を特に思いますのは、つい先日、野上俊静先生他共著の『仏教史概説中国篇』の第九章を拝見いたしましたところ、それは華厳宗についての叙述でありましたが、そこに「中国仏教における華厳宗は天台宗と共に、中国仏教教義思想理解のための通路とされているが、いずれもインドの仏教哲学を超克した中国独自の思想体系である。」（圏点筆者）と述べられているのを見て、今更の如く驚いたのでありました。

中国仏教というものは、そのように見られるものなのでしょうか。それがたとい結果的にせよ、インドの仏教を超克したと云われるなら、では日本仏教とは一体何なのであろうかと私は考えるのでございます。私には日本仏教の人々は、より受け身であったように思えるのです。決して中国仏教を越えようというような事はない。ましてインドは釈尊の聖地でございました。

中国仏教を尊重した日本人は、「唐決」と申しまして、平安の初期からずっと後まで、仏教学上の難問に逢着した場合には、中国に質問状を呈し、その決択を待つという事が行なわれました。それでは、よく云われるように日本人には独創性がなく、中国の文化を映す月光のそれであったのでしょうか。私は一概にそうは云えないと思うのであります。いわゆる論義の書である私記を見てゆくときに、その態度は受け身であり謙虚であります。しかしそこから克明に研鑽を重ねて、日本人独自の所論を精緻に展開しているのでございます。日本仏教の先覚者として、受け身の姿勢から仏教学を展開していった人々のことを、その人々の残した書物を、決して等閑にしてはならないと私は思うのでございます。この点につきましては、特に強調して申し上げたいと私は思います。

さて、千観の他にも、さきほど申し上げましたように、私記を書いた人々は沢山おられますが、源信には『三周義私記』があります。三周は『法華経』の法譬因の三周ですが、『法華経』では三度説法を繰り返して、次第に人々に授記を与えてゆくことについて、すなわを作仏の問題を取り扱うのが、義科の「三周義」であります。それについての源信の『私記』を見ますと、源信の時代に、叡山の学僧達が如何に作仏について論じ合っていたかが窺えます。それは、問答の設定における問いの中にそれが現われているのであります。

それによりますと、『法華経』に於ては、すべてのものは仏に成ると云って如来は授記を与えておられるが、それではその仏というのは、どんな仏であるのか。天台大師智顗は『法華文句』の中に、初住八相の仏であると云っている。しかし、それではおかしいのではないか。『法華経』は円頓の教えであるという。また智顗自らも円頓止観という事を云われるのなら、初住八相の仏というのは理に合わない。『法華経』の円頓の教を聞いたなら、それは初住八相の仏ではなくて、最初から妙覚の仏でなくてはならない。こういう事を叡山の中では、源信周辺の人々が問題にしていたようでございます。『三周義私記』の中で源信は、それに対する返答に相当苦心しているように見受けられます。

ところが一方、源信はこの問題に関して、宋の四明知礼に質問を致しているのでございます。いわゆる「唐決」で

あります。それは『四明尊者教行録』巻四に採録されている「答日本国師二十七問」の第一問に見ることができます。

それによりますと源信は、「近代の疑う者言わく」として、それは源信周辺の、恐らくは若い学徒を指すのでありましょうが、その疑問を持つ者達が、法華三周の授記による作仏は、初住八相の仏なのか妙覚の仏なのか、もし妙覚というなら、智顗が『法華文句』の中で「初住八相仏」といっているのに反するし、もし初住仏というなら、円頓速疾を建て前とする『法華経』に矛盾する。まして無数劫を経て究竟するに至っては、と云っているが、これについては如何に考えられるかと、知礼に返答を求めたのであります。それに対する知礼の答は、大体『法華文句』に記すところによっていますが、三周授記は八相応身の記である。この八相は法身について云えば、始めの初住分よりこれを顕わしているが、妙覚究竟の法身を究竟するには、衆生利益の道を経なければならない。また授記は必ずしも初住とは限らない。舎利弗のような上根は、はじめから妙覚に超入する。これは『文句記』にいうところである。しかし多く初住というのは、その始めの段階の者をさしている、と云うのであります。知礼のこの答えを見るとき、私は、平安初期以来、叡山の学僧が論じてきたことを思い返さずにはいられないのでございます。

たとえば安慧の『愍喩弁惑章』を見ますと、「即身成仏」の義に関する法相宗の学者との対論の中で、法相側が、円教の法華を聞く者は即身成仏するというなら、どうして舎利弗に対する授記が無量劫を過ぎて成仏するものであるのか、と云うのに対して安慧は、理と事とに於て説き、理の上からすれば一切は真如ならざるなく、三千の性相も三諦も具足して即身成仏すると云っています。そして事に約せば、声聞が事成るときに初住八相の記が授けられるが、この声聞は多量多数劫を経て成仏するとして、その文証に『文句記』を引き、さきに知礼の源信に対する答えとして申し上げましたことと、ほぼ同じような事を述べております。安慧の即身成仏についての記述は、最澄が徳一との論争に於て展開した所論を受けつぐものですが、安慧は理としての即身成仏は認めても、事としての成仏は劫数を経なければならないとしています。

ところが、事としても即身成仏を認める意見が現われてまいりますが、それは安然の『即身成仏義私記』に記されているところであります。そこでは六即義について、名字即の位に於て、即身成仏義を立てるのであります。中国天台では六即の次第を経て、究竟即に至って究竟妙覚の仏になるわけですが、日本天台に於てはこのような事を申すようになるわけです。こうして見てまいりますと、源信が知礼に問いを発したそれ以前に、知礼の答えに等しいものは既に日本天台の中に用意されていたことに、注目すべきではないかと思うのであります。

さて、こうした論義の義科に対する私記が作られていった頃の中国仏教の様子を見ますと、あたかも唐の初めの会昌の破仏以後、中国仏教が一時沈滞した頃に該当いたします。その頃、その空白の時を埋めるかのように、日本天台には「私記の時代」ともいうべき現象があらわれておりました。そして平安中期の源信の頃までに、精緻なしかも日本独自の展開を遂げたのでございました。

その時代は、別の方面から見ますならば、日本文化に於ては貞観の仏像が現われて、やがて藤原期の仏像彫刻に展開してゆく、丁度、日本の文化が国風化していった時であります。それと時を同じうして、日本天台に於てもまた、その学問が興っていったのであります。

さて、日本天台の学問について、少しつけ加えたいことがございます。それは千観の『八制』についてであります。『八制』は仏教修行者に対する八箇条の誡めですが、その中に、「往生極楽の他は、長く世俗の悕望を絶つべし」というのがあります。これは、一般に浄土教の人といわれる千観らしい誡めですが、それに続いて、「修学の事に於ては、その器に非ずと雖も、慇懃を致して必ず成就せよ」とあるのでございます。仏教の学問は、その器でなくとも、慇懃丁重につとめて、これをなし遂げなければならない、という、仏教の学問を仏教修行の方法として重く考えているのであります。単なる学者の学問としてなら、「その器に非ずと雖も」というようなことは云わないでありましょう。千観における仏教の学問の意味がよく示されていると思うのであります。そして、この『八制』の最後に千観は

「もしこの八誡に順わば、当に浄土の人と知るべし」と云っておりますが、仏教の学問が浄土往生の因であると把握しているわけであります。この仏教における学問と信仰の問題は、源信にもまたあてはまるように思われます。源信は千観の影響を受けることが多かったように見られるのですが、源信には御承知のように、厖大なる仏教の研究書が残されております。さきほどから申しあげております義科の私記に致しましても、十六種ほど数えることができます。そして因明に通暁していたこともよく知られることであります。この源信に『往生要集』が残されております。むしろ源信というときには『往生要集』の方が一般によく知られているのですが、仏教学者源信にとって、『往生要集』は如何なる意味を持つものであったのか、それは千観の『八制』に示すところに通ずるものであったように思われます。源信自身はその著『一乗要決』の末尾に、「我れ今一乗教を信解す、願わくは無量寿仏のみ前に生れ、仏知見を示悟開入し、一切衆生も亦復た然らんことを」と記しているのであります。

平安時代の人々の学問と救済の問題が、そこには自づと示されておりますが、一方、学問に徹することを勧めた人もあります。それは良源であります。良源は源信の師であり、千観とは同世代の人ですが、良源は遺言の中に、自分の亡き後には論義の他に何の善も為すべきではない。論義というものは煩悩を断ち、智慧を起こすものである、と誡めております。良源は広学堅義を起こして学問を勧めた人でありますから、この遺言があったものとは思われますが、ここには仏教の学問の徹底が見られます。

さて、日本天台における論義義科の私記について、さきほど来、申し上げてきたわけですが、「私記」ということで、ごく最近気付いたことがございます。それは唯識学者でおられる結城令聞先生が、「日本の唯識研究史上における私記時代の設定について」という論文を発表しておられることです（『印度学仏教学研究』二三―二、昭和五〇年）。この論文によりますと、日本の唯識、すなわち法相宗の中に於て、平安時代の「私記」というものに注意しなければならない。日本の法相宗には古くは法相六祖とか、あるいは護命とか、善珠とかの大学者がいるが、その後平安時代に

は学問は衰退し、鎌倉時代になって復興した、というのが、大方の学界の定説となっている。しかし、決してそうではない。「私記の時代」というべき時代を設定すべきであって、その間に人々は克明に研究を続けており、それが一つの土台となって、鎌倉時代に唯識がまた盛んになったのである、と書いておられます。

それと似たことが、日本天台の上にも云えるのではないかと思われるのであります。しかし、私の調べた範囲では、この私記というものは、日本唯識よりは日本天台の方に遙かに多いということでございます。日本天台は私記の時代を経て、平安中期頃から、数多くの論義の題を生じてまいります。その論題については、口伝法門の書には良源は九十余題を定めたと記しています。鎌倉時代には『百題』という書物が作られておりますし、南北朝時代には『宗要柏原案立』というものに九十余題をあげ、これは良源の定めたところによるとされております。その他、諸々の書があり、その数も内容も多岐にわたり、五百題にも及んだと云われ、徳川時代になるとそれらを整理して『台宗二百題』なるものが作られ、それは現在も依用されているわけであります。

さて、話を前に戻しまして、私記の時代から一足飛びですが、平安末期の日本天台の一様相ともいうべき点について申し上げたいと思います。平安末期の日本天台はともすると、口伝法門の時代であり、叡山そのものと共に教学もまた堕落していた時代と云われるようであります。しかし、そう簡単に結論を出すことはいかがかと思うのであります。平安末期に現われた『三十四箇事書』という書物がございます。内容は三十四の論題から成っておりますが、何れも論義からの展開であり、恵心流の学派の説を伝えるものとなっております。この学系には平安後期を代表する学者の忠尋という人もあり、この書は平安末期の日本天台の思想を窺う恰好の書のように思われます。この書物を見てまいりますと、日本天台の教理は、行き着く所まで行き着いたという感を深くするのでございます。

たとえば六即義の問題にいたしましても、理に於ては理即仏としての成仏を立て、事に於ては名字即に於ける即身成仏を強調するのであります。この考え方は、さきほど申し上げました、安慧や安然のゆき方を受けつぐものですが、

とくに安然の影響が濃厚に見られるようであります。名字即に於て如来の教えを聞く時に、即時に成仏するのであるというのであります。また『三十四箇事書』では、「世間相常住」という事をしきりに申します。この世間相常住も、安然が強調するところでしたが、『三十四箇事書』はそれ継承して、更にこれを押し進め、理に対する事としての世間のことがらをそのままに肯定しようとするのであります。そのままに肯定すると申しましても、それは日本天台における過去の仏教教理研究と変遷という、いくつもの段階を経て、現前の諸法を、松も竹も現前の諸法をそのありのままにそのままに観る、すべてを真如そのものとして観じてゆく姿勢となったように思われます。

ここまで行き着いた日本天台は、もはやそこには往相、つまり修行の道がと絶えてしまったのであります。そのとき、日本の仏教はどこかに展開しなければならない。親鸞のように自己の実存を厳しく見詰める人は、求道の道をそこから捜さなければなりません。あるいは道元の場合も、その少年の日に「本来本法性というならば、諸仏は何によって修行をし給うたのか」と問うたと云いますが、まことに頭悩明晰な少年らしい質問が起こってくるわけであります。この少年の質問に対しては、誰も答えてはくれなかったと云いますが、しかし十四歳の少年に向かっては、長い歴史を経て培われてきた思想の経緯を、説明することは、無理であったのであろうと思います。

行き着く所まで行き着いて、往相の道を失ったと見られる日本天台は、鎌倉仏教の祖師方によって、道が開かれました。しかしながら鎌倉仏教は、日本天台との断絶によって生まれたものではなく、日本天台より受けつぐものを受けつぎながら、往相の道を把握していったものであろうと思われます。

それは鎌倉仏教の祖師方の書物をつぶさに拝見すれば、自ら明らかなことであろうと思います。ここでは道元の場合を例に考えてみますと、修とか性とかの問題にしましても、一つの方向性を明示しながら、その体質には日本天台の考え方を留めているようであります。それは道元の少年の頃の疑問の解決の結果でありましょう。また『弁道話』なり、『普勸坐禅儀』なりを拝見いたしましても、そのように思われるのでございます。

話は大変に乱雑にわたったようでございます。私が研究の対象を日本天台に定めたいきさつなどから申しあげ、またこの日頃、日本天台に於て考えておりました事を申し上げたことでございます。雑駁な話をお聞きとり下さいましてありがとうございました。

（本稿は、本年一月二十二日に行われた大谷大学仏教学会主催、白土わか教授退任記念講演の筆録を先生に加筆していただいたものである。）